

被災地の同世代が取材した3・11「震災伝承新聞」 西宮・浜脇中生、震災の教訓学ぶ 東北からの「バトン」

2024/3/15 05:30

阪神 東日本大震災



東日本大震災の被災地の中学生が作った新聞を読み深め、発表する生徒たち＝浜脇中学校



東日本大震災の被災地の中学生が復興の現場を取材してまとめた「震災伝承新聞」を活用した授業が13日、浜脇中学校（西宮市宮前町）であった。同年代の生徒が書いた記事だからこそ共感し、災害をわがことと感ずることができた。「私たちが次代へつなぐ」。阪神・淡路大震災の被災地で暮らす中学生が、東北からの「バトン」を受け取った。（土井秀人）

■海から近く「僕たちにも現実的」

震災伝承新聞は河北新報社（仙台市）が2021年に始めたプロジェクト。宮城県内の中学生が参加しており、今回は甚大な被害を受けた名取市閑上（ゆりあげ）地区や石巻市、多賀城市で遺族や被災者ら取材した。発生時は幼少期で記憶も定かではない生徒たちが、震災の記憶と教訓を伝えようとしている。

浜脇中では新聞を教育現場で活用するNIE（教育に新聞を）を進めており、震災伝承新聞を使った学習には全校生徒843人が取り組んだ。この日授業のあった1年のクラスでは、事前に紙面を読み込んでおいた生徒たちが伝えたいことや感想を発表。過去の地震時を超える津波に襲われた石巻の遺族の言葉に、マニュアルに従うだけでは命は守れないことを知った。「震災の記憶がある最後の年代」と使命感を持つ多賀城高校災害科学科の生徒の姿に、感銘を受けた。復興を決して諦めないホタテ漁師の意志に触れ、前を向く大切さを学んだ。

紙面では「聞いて！ 知って！ 同世代へのメッセージ」というコーナーがあり、取材した生徒たちが顔写真付きで感想や思いを記している。同年代が地元の復興を願い、語り継ぐ大切さを訴える一つ一つの言葉が、遠く離れた浜脇中生の心に響いた。

近い将来の発生が懸念される南海トラフ巨大地震では、1時間52分後に最大3・7メートルの津波が浜脇中に到達するとされている。1年の常盤蒼空（そら）さん（13）は「海から近い所に学校がある僕たちにとって、次の災害は現実的なこと。被災者の声に耳を傾け、積極的に防災に取り組まないといけない」と決意を新たにした。

N I Eを担当し、昨年からの授業に取り組む渋谷仁崇（よしたか）教諭（45）は他のメディアの取り組みにも触れ、「いろいろな人がいろいろなアイデアで震災を伝えようとしている。みんながどうつかむかが大切」と呼びかけた。